

## 中央ユーラシアのテュルク叙事詩の英雄像

坂井 弘紀

ユーラシアの各地に広がるテュルク系諸民族<sup>①</sup>には、古来、高く発展した口承文芸の豊かな文化が栄えた。口承文芸の中でも、とくに重要なジャンルは英雄叙事詩であり、多くの英雄叙事詩が、テュルクの人々の間に語り伝えられてきた。すべての英雄叙事詩に共通する点は、尋常ではない、非凡な力を発揮する英雄が主人公として登場することである。特別な力をもつ英雄の活躍が共通する点ではあるが、叙事詩に描かれる世界や英雄が戦う敵はさまざまである。テュルク叙事詩の英雄は、大まかにいって、次の三つに分類することができるであろう。それらは、一、神話の世界で超自然的な活躍をする英雄（『ウラル・バトゥル』<sup>②</sup>、『エル・トシテュク』<sup>③</sup>など）、二、自分たちの共同体や集団を敵から守る空想上の英雄（『アルパムス・バトゥル』<sup>④</sup>、『コブランドウ・バトゥル』、『マナス』<sup>⑤</sup>など）、三、歴史上実在し、実際に英雄的活躍を行った英雄（『エディゲ』、『オラクとママイ』、『カラサイとカズ』、『チョラ・バトゥル』など）などであり、英雄のタイプも多様であることが、大きな特徴であるとい

えよう。

テュルクの英雄叙事詩の主人公の特徴として、尋常ならざる誕生や幼少から示す特殊な力、人並み外れた体力や技術などがある。戦う敵が、悪鬼デヴや妖怪ジェルベゲンなどの超自然的な存在であったり、カルマク（モンゴル系オイラト、騎馬遊牧国家ジュンガル）やキジルバシユ（シリア派イスラーム、サファビー朝）など実在した民族・集団であったりと、敵のタイプは違っても、こうした英雄の特徴は基本的に共通している。本稿では、中央ユーラシアのテュルク系諸民族に伝わる英雄叙事詩の主人公である英雄の特徴<sup>⑥</sup>について、次の五点をとりあげ、日本語訳された作品を中心に、具体例を提示しながら見ていきたい。

- 1 超自然的誕生
  - 2 特異な成長
  - 3 誇張して描かれる英雄
  - 4 英雄の援助者
  - 5 英雄の資質、英雄の変身
- 一 超自然的誕生

テュルク英雄叙事詩の主人公である英雄は、一般的に、尋常ではない、超自然的な誕生をする。多くの英雄叙事詩では、主

人公の両親となる夫婦には子供がおらず、そのことに夫妻は苦悩する。多くの場合、子に恵まれぬ夫婦は聖者廟などの神聖な場所を訪ね、わが子の誕生を祈願する。カザフに伝わる『アルパムス・バトウル』では、主人公の勇士アルパムスの父バイボルは、子宝に恵まれない、悲しみの心情を吐露し、多くのイスラーム聖者廟を詣でる。「子供が一人もいないので、キブラの方<sup>(7)</sup>に目をやって、二つの瞳に涙を満たし、バイボルは神に嘆いて言った。『神よ、願いが届きませぬか。(略) 創造の主、わが神よ、子供がいなくて悲しんでいるのに、子供を授けてくれないのですか?!』<sup>(8)</sup>」。

そして、イスラーム聖者廟をいくつも巡り、子が生まれることを祈願する。「サマルカンドの無数のバブ、オトラルのアルスタン・バブ<sup>(10)</sup>、サイラムの無数のバブ、これらの廟をすべて巡った<sup>(12)</sup>。ここで列挙されているバブ（聖者廟）はいずれも、中央アジアにおける有名な聖者廟である。夫妻の祈りは聖者たちに届いた。英雄の誕生の兆しは、聖者によって、直接夫妻に告げられる。

「蒼いロバにまたがって、白いターバンをかぶって、秘密の杖をもちながら、その白く清い道に、ひとりの聖者がやってきた。ロバから降りずにこう言った。「さあさあ、哀れな者たちよ、おまえたちには何が要る？『息子がほしい』と言うのだろう。聖者の廟を巡って、歩いて地面をはぎ取って、額を何度もこすりつつ、「息子をお授けください」と、創造の主、唯一神の方角に

向かい泣いていた。聖者たちの靈力を創造の主、唯一神がお聞き入れになったのだ。聞き入れられたことを知れ<sup>(13)</sup>」。

こうした聖者による誕生の告知は、夢の中で行われることが多い。テュルクの英雄叙事詩において、夢はしばしば重要な役割を果たす。叙事詩における夢の場面は、聖なる世界とこの世界とを結びつけるものとして注目される。

イスラーム世界である中央アジアの叙事詩は、上記のように、イスラームの要素が強いが、これに加えて、テングリ信仰とかかわるものと考えられる要素も見ることができ。たとえば、主人公の父はイスラーム聖者であるものの、母は天界に暮らすペリ（天女）であるとするものである。

「天から三羽の白鳥が降りてきた。白鳥は羽毛の衣服を脱いで、泉に入って沐浴した。聖者はその隙に彼女らの衣を盗んだ。衣服と引き換えに、最も若い娘が妻となって地上に残った。ある日、決して見てはならないとされた、妻の姿を聖者は見てしまった。人間離れた姿であった。妻は「私のおなかには男の子がいます」と言って、白鳥の衣を着て、飛び去っていった。やがて誕生した、その男の子はエディゲと名付けられた<sup>(14)</sup>」（『エディゲ』（カザフ））。

英雄がイスラーム聖者と天女を両親にもつということは、英雄の出自が一般的ではなく、特別であることを強烈に示す。この伝承は、英雄性が宗教・信仰的権威により高められていることを明示する典型的な例といえる。「天人女房譚」は世界の各地

に見られるが、このように、中央ユーラシアにも広く語り伝えられてきた。エディゲは遊牧政権ノガイ・オルタの建国者であり、このような王権と結びついた「天人女房譚」はユーラシア各地に伝わるが、ユーラシア中央部に広がる『エディゲ』は、この類話の相互関係を考える上で、大きな「鍵」となる伝承だと思われる<sup>15</sup>。

また、天から降ってきた肉を食べた回春効果により、英雄が誕生するという英雄譚もある。

「ある日の夜、老婆は起き上がり、ユルタの天井を開けた。横になっていた老人が天窓を見ると、引っかかった鹿毛色の雌馬の胸肉が目に入った。エルナザルは喜んで、「婆さんや、吉兆じゃ。その鹿毛色の雌馬の肉を早く煮てくれ！」といった。そして、肉が鍋に入れられた。肉を煮て食べ、老人と老婆は元気が出た。ほどなくして、老婆は妊娠した。男の子が生まれた」<sup>16</sup>（『エル・トステイク』（カザフ））。

「特別な食品」による回春の結果、英雄が誕生する例として、日本の『桃太郎』が思い浮かぶ。桃の中から生まれる果生型のストーリーがよく知られているが、桃を食べた老婆が若返り、子づくりをする回春型の『桃太郎』も広く伝わっていた。こうした回春による英雄の誕生は英雄の特殊性を強調する効果を生み出している。桃は若返り（回春）の効果があるほか、不老長寿の桃（西王母の伝説）や邪気を払う呪具としての桃（『古事記』）など、生命・生死にかかわる特別な食品と考えられた。天

空（テングリ神）から贈られた「鹿毛色の雌馬の胸肉」もまたこのような意味合いをもつと考えられよう。特別な食品が「馬の胸肉」である点は、遊牧文化を明確に示している。

一方、『桃太郎』が桃の中から誕生するように、ある物体から英雄が誕生する例もある。バシユコルトの『アルプ・バトゥル』では、「ある山で翁が居眠りをしていると、枕にしていた石が動き出した。翁は目を覚まし、斧でその石を割ると、男の子が出てきた」<sup>17</sup>。この場面からは、自然崇拜・精霊信仰とのかかわりが想起されるが、こうした誕生もまた、英雄の特殊性を示すものである。

## 二 特異な成長

特別な誕生をした英雄は、特異な成長をする。多くは、極めて短い時間で立派な勇士・戦士に成長するというものである。

「三日で素晴らしく成長し、四日目に話し始め、五日目に帯を締め、六日目に歩くようになった。もつと力強くなるために、アルパムシャという名が与えられた。この子がよろめきながら、石に当たると火が起こり、大地を踏むと水が出て、森を山を平原を巡り、獣を狩り、鳥を撃ち、勇士となって、その子は成長した」<sup>18</sup>（『アルパムシャ』（バシユコルト））。

バシユコルトに伝わる別のヴァリアントでも、「アククバクの息子はとても活発であった。その子はひと月分を一日で成長し、

一年分をひと月で成長し、一日の成長で立ち上がり、二日目は外に出て、馬に乗り、仲間の男の子たちと棒投げ遊びをして遊び始めた<sup>(19)</sup>。『アルバムシヤ』(パシユコルト)。このことに驚いたアククバクは有名な賢者を呼び、その理由を尋ねると、「赤ちゃんがこんなに速く成長するのを驚かないでください。この子はいへん力があり、慈愛あるアルプ(英雄)となるでしょう。この子にはアルバムシヤと名付けましょう!」<sup>(20)</sup>と、将来特別な英雄となる人物であるため、異常な速さで成長していると説明を受けた。異常な成長の仕方は、英雄に備わった特性であると明確に示される場面である。

こうした短時間での成長のモチーフは古く、『オグズ・カガン伝承』にも英雄の急速な成長が描かれる。テユルクの遊牧集団オグズの祖とされる、伝説的な英雄オグズ・カガンは次のように成長する。「オグズは、母の初乳を飲むと、それ以上は飲まなかった。生肉を、汁を、葡萄酒を求めた。口を開き始めた。四〇日後、大きくなった。歩いた。遊んだ。その足は牛の足のようであった。その腰は狼のようであった。その肩はクロテンの肩のようであった。その胸は熊の胸のようであった。全身は毛に覆われていた。馬群を追い、馬に乗り、狩りをした。日々が過ぎ、夜が過ぎ、益荒男になった<sup>(21)</sup>」。このような特異な成長は、テユルクの英雄伝承に共通する大きな特徴のひとつなのである。

### 三 誇張して描かれる英雄

超自然的な誕生や成長に加えて、中央ユーラシアの英雄の能力や行動もまた、通常ではありえないような極めて誇張された描写で叙述されることが一般的である。まずは、勇士アルバムスが幼少期に発揮した怪力の描写をみてみよう。

「アルバムスは一二歳になり、ジーデリ・バイスンの地で、大勢のコングラトの民のベクとなり、民を率いていた。アルバムスたちが遊んでいると、ちよつと棒で打っただけで、子供たちが死んでしまった。そのため、みな子供を外に出さず、家の中にいるようにした。ある日、アルバムスが一緒に遊ぶ友達が見つからずにいると、機織りをしている老婆のそばで眠っている子供を見つけ、「おい、起きろよ、一緒に遊ぼう」とボンと軽く突いた。その子供は耐えられず、死んでしまった<sup>(22)</sup>」(『アルバムス・バトウル』(カザフ))。

同世代の子供たちと対比させることで、英雄がはるかに強力であることを示す例である。英雄はまた、次のように不死身の超人である。

「銃を撃つても当たらない、刀で攻めても斬られない。川に投げても沈まぬが、それでも勇士は目覚めなかった。タイシユク・ハン<sup>(23)</sup>は民に尋ねた。『どうすればこやつは死ぬのだ?』」(『アルバムス・バトウル』(カザフ))。

勇士は一般的な人間とは異なり、長時間の睡眠を必要とする。そうした「勇士の眠り」の隙をついて、敵は英雄を攻めるのであるが、たとえ眠っている間であっても、銃の弾も当たらず、刀でも斬られず、水にも沈まない超人であるさまが描かれる。英雄がこのような「不死身の体」である理由は、聖者の加護があるためである。聖者は、英雄の誕生に際し、両親のもとに現れ、次のように告げる。「神がおまえを憐れんだ。さあ哀れなる者よ、目を開け。息子の名前はアルバムス。銃で撃つても当たらない。刀で斬つても斬られない<sup>(24)</sup>。この聖者の唱えた言葉が英雄を不死身にしたのである。なお、「勇士の眠り」も誇張されて表現され、たとえば、その眠りは「いつものように、一度眠ると、六日と六晩眠り続けた」<sup>(25)</sup>〔『アルバムシヤ』(パシユコルト)〕というほど長いものであった。

英雄はまたしばしば巨大な体躯であることが誇張されて表現される。

「アルバムシヤはとても強力な若者に成長した。その周りでは、アルバムシヤの力はひとときわ優れていて、大地に足を踏み入れれば、泉が湧き出し、石に腰掛ければ石は砕け、山に寄りかかれば山は崩れる、そんな見事な勇士として知られた」<sup>(26)</sup>〔『アルバムシヤ』(パシユコルト)〕。

「ウラル山脈の麓を七歩歩くと、その足跡は平原になった」<sup>(27)</sup>〔『アルプ・バトウル』(パシユコルト)〕。

「バル・チヨークル馬に乗ったバイバラクという勇士がいた。

二つの瞳の間では、三十の雄羊を飼うことができた。二つの肩の間では、三十の種馬を飼うことができた<sup>(28)</sup>。」「白い草原に目をやると家畜が行き交う場所に、大きな黒い丘があった。その丘の上には、二つの金の穴があった。二つの穴の間には黒い森が広がっていた。その黒い森から、とてつもない風が吹いていた。木や石が舞い上がる。生えていた木々が根こそぎ抜かれ、抜けた木々が大地を砕き、石は麦のように砕け、崩壊しているのが見えた」<sup>(30)</sup>〔『アルプ・マナシユ』(アルタイ)〕。

さらに、英雄が発揮する力はきわめて大きさに描かれる。美しい娘バルスン・フルーに求婚する英雄アルバムシヤにたいして、「バルスン・フルーは、白ほどの大きさの石を山頂からアルバムシヤに投げつけた。大地を揺るがし、耳をつんざいて転がる石にアルバムシヤは立ちほだかり、反対にその石を足で蹴りあげた。その石はバルスン・フルーがいる山頂を駆け抜けていった。バルスン・フルーはやつとの思いで逃れた。バルスン・フルーは怒って、家ほどの大きさの石を投げた。アルバムシヤは再びそれを蹴り返すと、石は元の方に飛んでいき、高い山の半分を破壊した。バルスン・フルーはどうか山の残り半分に踏みとどまった」<sup>(30)</sup>〔『アルバムシヤ』(パシユコルト)〕。

また、英雄と敵との戦いは幾年にもわたる。「硬い石を砕いた。硬い大地に湖ができた。天の雲が大地に落ちた。大地の塵が天まで昇った。高い山が砕け散った。深い川が波打った。七

年間もつかみ合い、大地には何も落ちなかった。九年間も戦って、土には何も落ちなかった。「力持ちのアク・カーンを、勇士アルプ・マナシユは白い光に投げ飛ばした。白い雲に埋まった。青い光に持ち上げた。青い雲に埋まった。鉄のタイガの山々に、三度進んで打ちつけた。鉄のタイガが真ん中から、砕けて割れて崩壊した。怒る暴君アク・カーンを、大地の七つの層にまで埋めて沈めてしまった」(『アルプ・マナシユ』(アルタイ))。

テュルク世界には、宇宙が天界・地上界・地下界に分かれるという「垂直多層的世界像」がある。人間が住む地上界とは別に、天界や地下界にも神や人間ではない存在があるという考え方であるが、この場面では、英雄が敵を天界に投げ飛ばしたあと、地上界における崇拜の対象である山岳に打ちつけ、さらには地下界の七番目の層にまで沈めたと歌われる。超人的な英雄が、この地上の世界のみならず、別の世界にまで敵を追いやるほど、猛烈な攻撃であったと描かれるのである。

さらに、英雄ウラル・バトウルは、湖さえも飲み干してしまふ。

「シウルガンの湖」に向かった。「兄の湖を飲み干してやる。一滴も残さず干上がらせてやる。人の心を不安にする、生き残ったデヴでもから、敵となったシウルガンから、すべての民を救い出すぞ！」とデヴの湖の水を集めた。シウルガンはデヴを湖に集めた。デヴの湖を飲み込んだので、ウラルの腹はデヴで満ちた。デヴたちはそれぞれウラルの心臓と肝臓を切り裂いた。

ウラルは力を失って、完全に衰弱してしまった。すべての望みは消え失せた」(『ウラル・バトウル』(バシユコルト))。

悪鬼デヴを根絶するために、英雄は、かれらの住まう湖を飲み干すという、大胆な攻撃を仕掛け、またそれを見事に果たすのであるが、かえってこれが裏目に出る。飲み込んだデヴは、英雄の体内で暴れて、その結果、英雄は命を落としてしまうのである。

以上のような、誇張された英雄の姿や動きは、人々が空想を広げて描き出してきた、なんともユニークな叙述であり、口承文芸ならではの描写であるといえるだろう。

#### 四 英雄の援助者

英雄が人並み外れた力を発揮するのは、常人離れた能力と体力によるものだけではない。テュルクの英雄叙事詩では、英雄を助ける援助者・協力者が登場することが常である。それは、先に見たように、イスラーム聖者であることが多い。敵に捕らわれた英雄は、虜となった悲しみを次のように嘆く。

「数多くの預言者たちよ、この苦しみはいつ消えますか？メダイナのムハンマドよ、トルキスタンのコジャ・アフメトよ、サマルカンドのパルワン・アフメトよ、ずっと穴の中なのですか。ガユブ・エレン・四十シルテンよ、望みは断ち切れたのですか?!」(35)。

現在のサウジ・アラビアにある聖都メディナに向かい、預言者ムハンマドやカザフスタン南部のトルキスタンにある廟に祀られているアフメト・ヤサヴィーなどイスラーム聖者、人々に幸運をもたらす守護精霊ガユブ・エレン・四十シルテンに請願する。すると、「ガユブ・エレン・四十シルテンは、勇士の手を取り支えていた。『勇士を死なせるわけにはいかない』。アルワク（祖先の魂）が動いていたのであった<sup>(36)</sup>」と英雄を救いに援助者たちが現れるのである。祖先の霊アルワクは、中央アジアの祖先崇拜とも深くかわるもので、人々は困難な時に、祖先の霊力・助力を得るために、その名を叫んだ。また、「アッラー」と叫んで乗馬した。ピルたちに助力を乞うて、カルマクに向かつて進んでいく<sup>(38)</sup>（『アルパムス・バトゥル』〈カザフ〉）と、唯一神アッラーにも助力を願うのである。イスラームや祖先崇拜、精霊信仰にもとづく多様な援助者が英雄を救うのである。

英雄の愛馬も重要な援助者である。英雄の騎乗する名馬は、英雄の片腕となつて、ときには助言を与え、ときには彼の命を救う役割を果たしてきた。これは、テュルク・モンゴル系の英雄叙事詩に共通する大きな特徴のひとつである。

地下牢に囚われた主を愛馬が救う例を見てみよう。「愛馬の）三本の毛を一本に束ね、それを燃やした。毛が燃えるにおいが鼻に届くと、灰色の駿馬は暴れて、いなないた。それから小屋の中に収まらぬほど、蹄を打ちつけ、後ろ足で立ち上がった。いななき、蹄を打ち鳴らし、怒り狂い、かわいそうに、足の枷

と頭の馬勒を壊した。小屋の見張り番は、「この馬に何があったんだ？」と開けて見てみようとした。小屋の扉を開けてみようとする、灰色の駿馬が見張り番を突き飛ばして、外に出て逃げていった。いななき、いななき向きを変え、アルパムシヤがいる地下牢に近づくと、アルパムシヤの鳥が穴を開いたところから尻尾を出した。アルパムシヤは灰色の駿馬の尻尾をつかみ、外に出ることができた。そして愛馬に乗り、そこを立ち去ったのであった<sup>(39)</sup>（『アルパムシヤ』〈バシユコルト〉）。

瀕死の状態の英雄が愛馬によって、復活する例も挙げよう。「アク・ボロ馬は、真ん中の聖なる湖に、一本の細い毛の姿で来た。馬頭の大きな泡<sup>(40)</sup>を飲んで飛び去っていった<sup>(41)</sup>」。「馬頭の大きな金の泡を、アルプ・マナシユにもたらした。勇士アルプ・マナシユは昔のところから六倍に、古いところから十倍に、回復したのであった<sup>(42)</sup>」（『アルプ・マナシユ』〈アルタイ〉）。この金の泡がなんであるかは判然としないが、ソーマ（インド神話）／ハオマ（『ヴェーダ』）のごとく、活力をもたらす霊薬のような泡であり、それを愛馬がもたらしてくれるのである。

シヤマニズムの要素が色濃い叙事詩の場合、それは世界樹を巢とする聖鳥・霊鳥である例が多い。たとえば、それはカラクシユとよばれる超自然的な鳥である。クルグズの『エル・トシユテュク』では、カラクシユ鳥は英雄を地下世界から地上世界へと連れ飛ぶのであるが、その際、四〇頭のヤギの肉と革袋の水を、その鳥の口に入れてやる。そして、それらがなくなると、

「四〇頭の肉がなくなつた。飛んでいたカラクシユは首を四方に

向けて飛び回つた。トシユテユクは自分の片目をえぐり出した。自分の腿の肉を切り取つた。カラクシユの口に目玉と肉を与えてやつた。カラクシユは地上に飛び出した」と英雄は自らの肉体をカラクシユのために与えるのである。体の一部を欠損した英雄はどうなつたか？「カラクシユは」トシユテユクを飲み込んでしまった。それからトシユテユクを吐き出した。エル・トシユテユクのえぐり出した目玉はもとに戻つていた。エル・トシユテユクの切り取つた腿の肉はもとに戻つていた。それからカラクシユは飛び立つて、地下の世界に入つていった<sup>(43)</sup>。不具者や死者となつたものを、超自然的な能力で飲み込み、そしてそれを吐き出すともとの姿となつていくという場面は、シヤマニズムの重要な要素を反映していると考えられる。

テュルク英雄叙事詩の英雄は、アツラーやイスラーム聖者、愛馬や聖鳥などさまざまな援助者の助力を、危機の際に受けて、力を取り戻したり、復活したりするのである。

## 五 英雄の資質

さて、叙事詩の英雄は、当然のことながら、強敵と戦い、人々に安寧と安全をもたらす理想的な人物であるが、その理想的な英雄像はどのように叙述されているだろうか。『アルバムス・バトゥル』では、英雄は一〇万もの兵をたった一人で迎え撃つた

と描かれる。

「カルマク兵は馬に乗つた。一〇万の兵が急襲した。アルバムスは迎え撃つ。葦に降り立つ白鳥のように。誰も相手がわからぬままに、誰も相手が見えぬまま、天から射した光のように、無数のカルマクが倒れていった。漂う熱気が毒のように、戦場に流れた真つ赤な血が、川のように溢れて流れた。それまでどんな戦いも、これほどのものではなかつた」<sup>(44)</sup>（『アルバムス・バトゥル』〔カザフ〕）。

英雄と敵との戦いは、これまでの歴史にはないような苛烈な戦闘であつたとされる。また、アルタイの『アルプ・マナシユ』の次のような描写も劇的である。

「（敵の）アク・コボンは一羽の鶴に変身し、家から飛んで出ていった。白い光に隠れた。それを見ていたアルプ・マナシユは貫禄十分に立ち上がった。七十二本の支柱がついた、鉄の弓をぐいっと引いた。血の矢をさつとつかんだ。白い鶴の背中を狙つて矢を放つた。それからしばらくすると、血の矢が落ちてきた。白い鶴の頭から厚い皮を剥ぎとつた」<sup>(45)</sup>。

英雄が敵を倒したことで、平和が訪れ、人々には幸福な生活が取り戻される。「勇士アルプ・マナシユは残酷なアク・カーンを、邪悪なアク・コボンを容赦なく打ち負かし、前代未聞の宴を挙げた。集まつた人は歓喜した。みんなの暮らしは明るくなつた」<sup>(46)</sup>。

いまわの際の英雄は、人々と息子たちに遺言を次のように残す。英雄の望みは叙事詩の根幹のテーマそのものであり、英雄の高潔な姿を象徴している。パシユコルトの『ウラル・バトゥール』では、英雄の死が物語のクライマックスとなっている。

「わが民よ、みなに言っておこう。勇士よ、おまえが勇士であつても、勇士の力を持っていても、国中を巡り、国中を見ずに、膝まで血に浸かつて歩かずに、おまえの心が勇士になることはない。邪悪の仲間には絶対なるな、話し合わずに事を進めるな。息子たちに、言い残そう。わたしが清めたわが大地で、人々に幸福を与えなさい。戦になれば、先頭に立って、みんなの国を作りなさい。榮えある勇士になりなさい。老人にたいしては古臭いと言わないで、なんでも話を聞くのです。若者にたいしては青臭いと言わないで、なんでも話をするので。人々の目に塵が入らぬよう、見えなくなつてしまわぬよう、孤立無援の目にたいしては、その目のまつげとなりなさい」。

そしてウラルは人々に善を勧め、悪を懲らしめるよう諭す。「おまえたちに言っておこう。おまえたちに善があるように、人々がおまえたちの財産となるように、悪には道を開かぬように、善からその目をそらさぬように！」<sup>(47)</sup>。

さて、英雄は、ただ武術に優れ、軍事的偉勲を残すだけではない。詩作や詩吟の才能、楽器の演奏能力といった、詩や音楽の分野においても秀でた才覚をもっていることが求められた。

「ピスミツラー<sup>(48)</sup>と云つて、詩を、たくさん詠もうぞ、ジャール・

ジャール。宴にお急ぎでないのなら、たくさん詠もうぞ、ジャール・ジャール<sup>(49)</sup>」(「アルバムス・バトゥール」(カザフ)。

ジャール・ジャールとは、中央アジアの婚礼の儀礼歌のひとつである。ジャール・ジャール(ヤル・ヤル)は、花嫁が家を出るときに故郷や家族と別れる悲しみを慰める歌で、花嫁の悲しみを歌つた新婦側、花嫁の心を慰める新郎側とに分かれて、双方が詩の掛け合いをする。英雄は、自分の妻が謀略によつて奪われようとしているときに変装をして現れ、ジャール・ジャールに加わることで、自らの正体を妻に知らせるとともに、即興の詩で妻と結婚しようとしている敵を言い負かすのである。古来、中央アジアは「詩の海」であつた。作詩と朗詠の能力はたいへん尊ばれ、ときには詩の語り手や詩人が社会・政治的な役割を果たした。叙事詩の主人公である英雄にも、詩の才覚が不可欠であつたのである。

また、楽器の才能も英雄には求められた。「アルバムスは」このヤギの角と肋骨でスルナイをこしらえた。これを娘たちのところにもつていって、贈つてくれ<sup>(50)</sup>。「勇士であることに加え、狩人や弓矢の撃ち手、クライ吹きであることが、アルバムシヤの名声を高めていつた<sup>(51)</sup>」。スルナイとは中央アジアの吹奏楽器で、ここではムイズ・スルナイ(角のスルナイ)といわれる、空洞にした角をもちいたスルナイを意味しているだろう。また、クライはパシユコルトの吹奏楽器で、葦などの植物からつくられ、日本の尺八と似た音がする。英雄はこれらの楽器を奏で、その

美しい音色でヒロインを魅了する。「アルバムシヤ・バトゥルよ、クライをもう一度吹いてください。一二曲、贈ってくださいな。ハンの娘を喜ばせてください」(『アルバムシヤ』(ハシユコルト))。

武力や腕力だけが英雄に要求される資質ではない。詩を作り、それを歌い、また楽器を作り、それを奏することも英雄の資質とされた。文武両道が英雄の理想的な姿なのである。

ところで、英雄は質実剛健だけではない、意外な姿も見せる。敵に捕らえられ、絶望の淵に置かれたとき、英雄は次のように嘆き悲しむ。

「狭いところで苦しんでいます。私の人生は終わるようです。死なずにもう一度戻りたい。かわいい妹よ、妹よ、私の目から泉が湧くよ。昼も夜も悲しむ声が、おまえの耳にも聞こえないか?」「哀れな母よ、どうしましょう。穴ですすり泣いている、死んだあなたの息子を見たら。ああ、なつかしいお母さん、一人息子が死んだのを見たら、唯一神の力は強く、苦しい試練をお与えになった。母さんのミルクに恥ずかしい。あなたの子供は、生きたまま墓の中」(『アルバムス・バトゥル』(カザフ))。

地下牢に入れられた英雄のこのような嘆きは、敵との戦いにおける誇張された活躍と比べると、英雄らしからぬといえるかもしれないが、ずば抜けた英雄の活躍の場面を際立たせる「人間くさい」英雄の姿とみなすこともできよう。

おわりに

中央ユーラシア・テュルクの英雄叙事詩で活躍する英雄たちの特徴について、邦訳され、参照しやすい作品からの例で具体的にとりあげてみた。英雄はいずれもふつうの人々とは大きくかけ離れた身体や能力を有しており、その誇張された表現が口承文芸の魅力が強めている。英雄叙事詩は、テュルク口承文芸の大きな柱であるが、その柱の核は英雄たちの姿や振る舞いにほかならない。

テュルクのみならず、世界各地の英雄譚や英雄伝承に登場する英雄たちも誇張された、大げさな表現がなされる。長い間、ヒーローの活躍が口承で伝えられてきたのは、口承文芸ならではの自由な発想と豊かな想像による英雄たちの姿が人々の心を引きつけたからではないだろうか。こんにち我々が映画やテレビ番組で活躍する超人的ヒーローにもつ憧れの想いを、英雄叙事詩の語りを聞いた人々も必ずや抱いていたことであろう。

注

(一) テュルク系諸民族は、北シベリアのサハ、南シベリアのアルタイ、ハカス、中国のウイグル、中央アジアのカザフ、ウズベク、クルグズ、トルクメン、ヴォルガ・ウラルのタール、バシユコルト、カフカースのアゼルバイジャン、

西アジアのトルコなど、ユーラシア大陸の各地に居住する。

- (2) 『ウラル・バトゥル』は、ウラル地方のテュルク民族、バシコルト(バシキール)人の間に語り伝えられる英雄叙事詩。くわしくは、拙訳『ウラル・バトゥル』平凡社東洋文庫を参照。

- (3) 『エル・トシユテュク』は、中央ユーラシアのカザフやクルグズ、シベリア・タタールに伝えられる神話的英雄物語。くわしくは、拙稿「地下世界で戦う勇士―中央ユーラシアの英雄譚『エル・トシユテュク』から」篠田知和基編『異界と常世』楽蔭書院、二〇一三年を参照。

- (4) 『アルパムス・バトゥル』は、南シベリアからアナトリア地方にいたるユーラシア各地に広がる英雄物語。くわしくは、拙訳『アルパムス・バトゥル』平凡社東洋文庫を参照。

- (5) 『マナス』は中央アジア、クルグズに伝わる英雄叙事詩。くわしくは、若松寛訳『マナス 少年編』平凡社東洋文庫、二〇〇三年を参照。

- (6) なお、英雄叙事詩の主人公は一般的に、勇士や勇者を意味するエルやバトゥル、アルプが、個人名に付される。エルやアルプは突厥碑文にも刻まれている古い言葉で、「最古の叙事詩」とされる「アルプ・エル・トゥンガ」にはこの二つの言葉が含まれている。また、バトゥルはテュルク・

モンゴル系の言葉で、モンゴル語ではバートル。モンゴル国の首都「ウラン・バートル」は「赤い英雄」の意味である。

- (7) キプラとは、ムスリムが礼拝で向かう方角のこと。

- (8) 拙訳『アルパムス・バトゥル』平凡社東洋文庫、一三頁。

- (9) バブとは、カザフスタン南部をはじめ、中央アジア各地のスーフイズムの聖者廟のこと。

- (10) カザフスタン南部にある古都オトラルにある聖者廟。

- (11) 現在の南カザフスタン州の町。歴史的な聖者廟がある。アフマド・ヤサヴィーの生地。

- (12) 『アルパムス・バトゥル』、一八頁。

- (13) 同上、二〇〜二二頁。

- (14) 拙稿「『草原の英雄』を生んだ両親は誰か？」小長谷有紀編『大きなかぶ』はなぜ抜けた?』講談社現代新書、二〇〇六年、一一一頁。

- (15) 拙稿「中央ユーラシアと日本の民話・伝承の比較研究のために」『和光大学表現学部紀要』一六卷、二〇一六年、五〇〜五一頁。

- (16) 拙稿「カザフの神話的昔話「エル・トステイク」」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』一四号、二二二三頁。

- (17) 『アルパムス・バトゥル』、三〇八頁。

- (18) 同上、一五四頁。

- (19) 同上、一八一頁。

- (20) 同上、一八一頁。
- (21) Bang, W., Rahmeti G.R., *Oğuz Kağan Destanı*, İstanbul, 1936, s.30. 拙稿「オグズ・カガン説話」小松久男編著『テュルクを知るための61章』明石書店、二〇一六年、二四頁。
- (22) 『アルパムス・バトゥル』、二九頁。
- (23) 同上、六六頁。
- (24) 同上、二二頁。
- (25) 同上、一九〇頁。
- (26) 同上、一八二頁。
- (27) 同上、三〇八頁。
- (28) 同上、二二〇頁。
- (29) 眠っているアルプ・マナシユの鼻の穴のこと。
- (30) 『アルパムス・バトゥル』、一三三頁。
- (31) 同上、二六一頁。
- (32) 天上の神テングリ、ウルゲンを指すものと思われる。
- (33) 『アルパムス・バトゥル』、二六一～二六二頁。
- (34) 同上、一三二頁。
- (35) 同上、六九頁。
- (36) 同上、七一頁。
- (37) スーフイズムの導師のこと。ピールともいう。
- (38) 『アルパムス・バトゥル』、八六頁。
- (39) 『アルパムス・バトゥル』、一七五～一七六頁。
- (40) この泡は、「馬頭の大きさの金の泡が、昼も夜も湧いている。その泡をつかむと、消えそうな炎も燃え上がる。死にそうな若者も元気になる」という復活の泡である。
- (41) 『アルパムス・バトゥル』、二五一頁。
- (42) 同上、二五八頁。
- (43) Кайыпов, Сулайман, *Проблемы поэтики эпоса «Эр Тигиток»*, Фрунзе, 1990, 215-216.
- (44) 『アルパムス・バトゥル』、九一頁。
- (45) 同上、二七四頁。
- (46) 同上。
- (47) 拙訳『ウラル・バトゥル』平凡社東洋文庫、一三二～一三三頁。
- (48) 「神の御名において」を意味するアラビア語。
- (49) 『アルパムス・バトゥル』、一三七頁。
- (50) 同上、八〇頁。
- (51) 同上、一八二頁。
- (52) 同上、一九三頁。
- (53) 同上、六九～七〇頁。

(さかい・ひろき／和光大学)